

岐阜県農業技術センターニュース No.36

温暖化に適応した新しい栽培技術を確立するためのプロジェクト研究を開始しました。
（作物部、野菜・果樹部、病理昆虫部）

温暖化の進行、気候変動の拡大に伴い、これまでの栽培技術では安定的な生産が困難な場面が多くなってきています。本県農業を継続・発展させるために、温暖化条件でも安定生産を可能とする栽培技術を開発する研究を開始しました。

夏期高温に対応した水稻品種の育成と良食味栽培技術の開発 （作物部）

近年の夏の猛暑が米の登熟期間に作用して、米品質が近年著しく低下しています。特に、玄米の白濁化が著しく、生産者の手取り収入減へ直撃しています。当センターで育成した高温に強い米系統「岐系203号」現地実証ほを、全国的にも暑いことで有名な多治見市に設置して、品質低下緩和の有効性を検証しています。



多治見市内の水田での実証開始

気候変動に対応したイチゴの栽培技術、品質保持技術の確立 （野菜・果樹部）

気候変動により、イチゴの生産は収量の減少、果実品質等の低下がみられています。そこで花芽分化を安定させる育苗技術、高温下での果実品質低下を軽減する生産技術、収穫後の果実品質保持技術を開発し、高品質な「岐阜イチゴ」の安定供給を図ります。



日焼け果

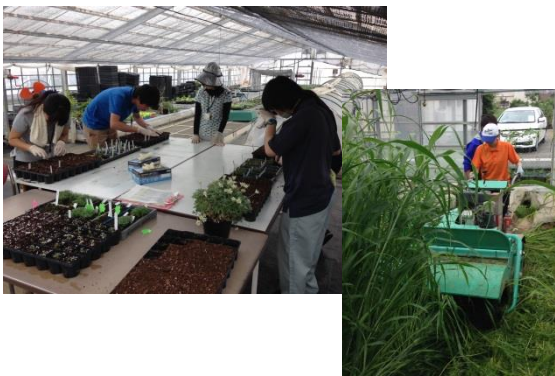
温暖化の進行により、害虫発生期間の長期化や、発生回数・発生量の増加等が心配されます。

当センターでは、これまで環境に優しいカキの害虫対策として、交信攪乱剤（フェロモン）の開発を続けてきましたが、気温の上昇で効果の持続性が悪くなる恐れもあります。そこで、温暖化が進行しても品質の高いカキの安定生産が図れるよう、交信攪乱剤を中心とした防除体系の組み立てを行います。



多発したフジコナカイガラムシの被害

農政部新規採用職員研修が開催されました(7月24-25日)



平成29年度農政部に配属された新規採用職員を対象とする研修が開催されました。これまで可児市の農業大学校等で行われていましたが、本年は農業技術センターでの開催となり、所を挙げて対応しました。1日目はガイダンス等に加え、当センターの研究概要の説明を、2日目は午前中に各部での実験作業の実習を行い、受講生は熱心にいろいろな部門の作業を体験しました。

県イチゴ部会技術研修会が開催されました(6月12日)(野菜・果樹部)



イチゴ栽培は、この時期に出荷を行っている生産者がある一方で、すでに次作に向けての育苗作業も始まっています。園芸特産振興会イチゴ部会主催の技術研修会が当センターで開催され(生産者等75名出席)、「もう一度見直し!イチゴの育苗管理」と題し、苗作りについて講義を行いました。講義後は、センターの育苗ハウスにおいて、実際の栽培状況を視察していただき、研究状況を説明、意見交換を行いました。